



私たち人間だけでなく、動植物すべてが生かされる命の源。その水が流れる川の側にアイヌコタン(村)はつくられました。川は四季を通じてくらしに必要なさまざまな恵みを与え、アイヌの自然観とも大きく関わりをもつ重要な位置を占めます。

大正十四年に千歳川で撮影されたサケ漁の様子が記録として残されています。細長いチブ(丸木舟)に男性が二人立ち舟を進め、一人は巧みに舟を操り、もう一人は



村木美幸
(アイヌ民族
文化財団理事)

湧き出した水が小さな流れとなり、尽きるこのない川の水は、私

Vol.78
今月のテーマ
川のくらし

なるほどアイヌ文化エッセイ

ソノコ de ソノコ



アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、
その魅力を交代で執筆する
ソノコ(=お便り)形式のエッセイです。



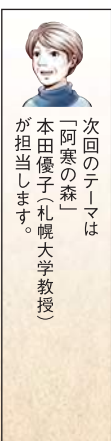
イラスト/ 莊田悠人

マレクと呼ばれるアイヌ独特の釣鉤かきもりを使いサケを次々と捕らえます。流れの中、チブを縦横無尽に操船する姿は圧巻です。

秋、川にはアイヌ語でシベ、本当の食べものとと呼ばれるサケが産卵のため遡上します。サケの保存は乾燥保存が主で、川に入ったサケの方が脂も落ちて油揚げすることなく長期にわたって保存がきくのだとい

います。

本格的なサケ漁のはじまるこの時期、新しいサケを迎える儀礼、アシリチエフノミが、豊平川や千歳川など各地で行われます。私の住む白老でもサケの豊漁と漁の安全を祈願するベツカムイノミ(川の祈



「阿寒の森」
本田優子「札幌大学教授
が担当します。」

り)が白老川の河口近くで行われます。

河口近くに又サ(祭壇)をつくり、イナウ(木幣)を立て、入江のカムイには、秋が来たことを告げ、サケが豊漁であることを願う、渚のカムイには海が荒れるとサケが上らなくなるので、油断することなく見守って下さいと願ひ、川下と川上のカムイには川はいつもきれいに活すことのないよう約束をし、たくさんサケを上らせて下さいと願ひ、キツネのカムイには海の幸、山の幸をとわずたくさんさんの獲物を与えて下さいと願ひ、祈ったといひます。

川は、昔と変わることなく同じように流れ、満々と水をたたえ動植物の命を育んでいます。カムイからの恵みに感謝し、祈りとともにあつたアイヌの川のくらしは大きく変化しましたが、川でのサケ漁が禁止されてからの長い間、行われることなく途絶えていたサケ儀礼は、アイヌ文化復興の気運が高まる一九八〇年代に復活し、今では多くの地域で伝承されています。



- 本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
- 村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
- 莊田悠人(しょうだゆうと):平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。